

スロベニアにご関心を抱く皆様へ

1. はじめに

2015年9月4日に3年近くの任期を終えてイスタンブールを離任し、東京にて、皇居での認証官任命式と外務大臣によるスロベニア国駐箚辞令の交付、両陛下と皇族方によるご接見などを経て、10月23日にスロベニア（首都リュブリャナ）に着任しました。

着任のご挨拶が遅れ申し訳ございません。前任地のトルコよりは多少欧州寄りの赴任先となりましたが、例えばイスタンブールからですと、トルコ航空の直行便（飛行時間約二時間）が頻繁に出ております。多くの当国外務省関係者、経済界がこの路線を使っています。

2. 新たな任国のスロベニア

～コンパクトな、でも懐の深い国～

(1) この国は、旧ユーゴの中では格段に欧州に近く、技術水準やGDP規模も優良だった国ですので、規模は小さいながら（ほぼ四国ほどの大きさに人口は約206万人）、今でも一人当たりGDPで言えば18,100ユーロで西欧のポルトガルよりは上（ドイツは35,400ユーロ、イタリアで26,600ユーロ）、旧東欧諸国では変わらず最良です（観光で潤うクロアチアでも10,200ユーロ、私が勤務したポーランドは10,700ユーロ、同じくセルビアでは4,800ユーロ）。

(2) コンパクトなこの国にフルセットの産業はありませんが、コンピューター制御を中心に、ハイテクと電気小型飛行機のような実に面白い着想を売りにして、欧州の産業技術シーンで独自の位置を占める隙間産業には活用の脈がありそうです。この国でハイテクのパイロット事業を行い、結果が良好であれば欧州中核地域への輸出を目指す、というのが産業立地の立ち位置のようです（最新の例では、新エネ

ルギー・産業技術総合開発機構 NEDO スマートグリッド実証事業）。

(3) 当国の会社規模は概ね小さいものの、独創的に頑張っているようです。中小企業、マイクロ企業などを中心に、利点は着想豊かなアイデアとハイテク人材の宝庫、課題は本格的な民営化、銀行部門の更なる強化と資金調達、徹底したグローバル化と柔軟な労働市場の実現、でしょうか。

IT産業、医薬品、ロボット産業等において多くのハイテク人材は、既にドイツとオーストリアを中心に活躍のようですが、最高学府のリュブリャナ大学などをはじめ、後進人材は豊富です。わが国からは、産業ロボット分野で安川電機社とファナック社、家電分野としてはパナソニック社等々が進出し貢献しております。建国25年を経て、スロベニア経済はもう一皮むける時期に達しつつあります。

3. 観光資源～たっぷりあります～

(1) 本当に満載状態です。豊かで多様な自然に加え、スローフード・スローライフを味わえる滋味に富んだ料理と旨いワイン、アルペンスキーからヨットレースまで楽しめる山海のスポーツ、ローマ帝国に遡る歴史と遺跡、中世の街並みが良く残る地方都市群、といったところででしょうか。

具体的には、この国は、北のアルプス（オーストリア）、西の地中海（イタリア。一部は旧ヴェネチア共和国領であり、また、ゴリツィアに接するブルダ地域～イタリア語で丘を表すコリオ Collio、スロベニア語でブルダ Brda と称する小丘が連続するワイン栽培の中心地）、南のクロアチア、東のハンガリーと囲まれています。

(2) 北西部から北部ではスキー、山歩き、ブレッド湖やボヒン湖といった美しい氷河湖とソチャ渓谷のような自然豊かで、欧州第一の溪流釣りの聖地を含む渓谷地域、ここでしか味わ

えない黄金のマス(ポーヒン湖で朝獲れたマスを昼にブレッド湖畔で味わえます。湖岸西側の鉄道駅前にあって、湖畔を見下ろす位置にある Hotel Triglav Bled のレストランでも、焼き方が絶妙な黄金のマスを戴けます)。土壌の良さを背景に豊かな固有種を含む数多くのワイン畑とレアワイン(ドイツ大使、オーストリア大使も感嘆)、スペルト小麦のようなアレルギー面でも良質で健康的な古代小麦を使ったパスタやパン(大手製粉パスタ会社 Mlnotest 社)。健康志向の国民の嗜好が良く反映されています。

イタリアやクロアチアと地続きの西部(沿岸線は約 46km)では、マリンスポーツやおいしい地中海料理、イタリアの味に勝るプロシュートとトリュフと赤ワイン。南西部では、石灰岩質の土地柄(カルスト地形。「カルスト」という表現はここから発祥)を背景に、欧州最大規模の鍾乳洞と夏場は消える湖と多様な生物体系、平野中心の東部では白ワイン、デザートワインとスパと美味なパンプキンシードオイル入りパンプキンスープなどと、季節を問わずお好みでいろいろ楽しめる、というのが特徴のようです。

(3) しかも、首都から 1 時間ちょっと北に走れば、もうそこはアルプスの山々の懐、あるいは、西に下れば地中海沿岸という、朝起きてから天候を見て行き先を決められるアクセスの良さ。天候面では、数多くの渓谷(渓谷毎に方言が異なります)や沿岸など、文字通り、同じ季節でもスポット毎に異なる気象状況を選んで滞在パターンを楽しめる面白さ。

(4) また、リュブリャナ空港の他、フライトが多いヴェネチア(231km)とウィーン(384km)には陸路で約 4 時間弱、トリエステ(101km)北のモンファルコーネ空港なら約 2 時間、ザグレブ(クロアチア、143km)にも約 2 時間で移動できるという、地の利も魅力です。

イタリア北東部のフリウリ・ベネチア・ジュリア州にある、ローマ帝国時代の拠点都市アクイ

レイア(欧州最大規模のモザイク遺跡)などに繋がる観光ルート(リュブリャナはローマ帝国時代のエモーナ)も面白そうです。既に欧州在住の日本人の方々は、結構、比較的長い滞在でスロベニアにお見えになり、山、渓谷、温泉などでリフレッシュされています。人気のクロアチアへの観光展開も魅力です。

(5) ヴェネチア共和国の残照のような、ヴェネチアの建築様式や総督府のような統治施設、入り組んだ小石で覆われた石畳の街並みなどを美しく残しつつ、市の収入の 25%を観光から得るピラン(ピラーノ)の魅力は尽きることがありません。

ピラン市後背地との境目に残る市壁の上から眺める、地中海に突出する見事な全容、青い空と水平線の遠く右手にジュリアンアルプスとイタリア・ドロミテの白い連山との按配の妙、市内に響き繋がる 15 分毎の鐘の音、スロベニアの美しさを誇る、白大理石で覆われた楕円形のタルティーニ広場(5 . パラ 3)、新鮮な魚料理と絶妙な味わいのパスタ料理等々と、まさしく百聞は一見に如かず、でしょうか。

また、ピランの南方、クロアチアとの国境にあるセチョウリエ Sečovlje(イタリア語で Sicciole)には広大な自然公園と塩田が広がっています。アドリア海の潮流は常時強く、海水が浄化されており、4 月から 8 月までの期間のみに「ピランの塩」は作られ、8 月の熱い数週間に強烈な太陽熱と風によってピラミッド型結晶体の塩花(ソルトフラワー)が生まれます。ピランの塩とチョコレートの組み合わせは微妙な味加減ですので、是非試食をどうぞ。

まだ寒いリュブリャナからは、高速道路を使えば、車ならわずか 1 時間 20 分ほどで真っ青な地中海とピランに到達します。

(6) このピランから北上すると、コペル、トリエステ(伊)、モンファルコーネ(伊)、ゴリツィア(伊)を経て、あるいはノヴァゴリツィアを経由して、ブルダ Brda 地域に達します。この地域は、西部と南部がイタリアとの境界に、

東部はエメラルド色のソチャ渓谷とソチャ鉄道（夏場には蒸気機関車の運行で知れています）に、そして北部はアルプス観光の拠点となる村々に囲まれた、温かな気候や乾燥肉でも有名であり、芸術家の活動が活発な土地柄です。ちなみに、日本の抹茶や和食、日本酒と日本ウイスキーが好まれる土地でもあります。

ここは既述の通り、丘が連続し日当たりも良く栽培に適した土壌と相まって、ワイン造りが盛んなところ。面積 72km²、人口 5 千人、43 村というブルダ地域には、1, 000 ヘクタールのブドウ栽培地があり、ワインの 7 割は白ワイン、3 割が赤ワインです。

この辺りは、およそ 5 千万年前にはまだ海だったところであり、ミネラルと塩に富んだ土壌を持ち、ブドウは地中深く張った根を通じて緩やかに栄養分を吸収しています。しかも、地中海性気候とアルプス性気候が交差する地域でもあるため、手摘みのブドウはこくがあり香りに富み、ほんの数年の間木樽に熟成すればボトル詰めとなり楽しめます。

イタリアと共通のブドウ品種に加え、同地域中部の村ヴィシュニエヴィク Višnjevik における 1336 年の購入契約書に初めて記載されたことから知られる完全固有種レブラ Rebola（伊 Ribolla Gialla）に加え、ピコリット Pikokit（伊 Piccolito/独 Weiser Blaustinge）やヴェルドゥツ Verduc（伊 Verduzzo）といった固有品種からも、見事なワインや残留糖分に富むデザートワイン（例えば Markiz 銘柄だと、Residual sugar は 201.2 g/l と通常の倍以上）が生み出されています。しかも上質ワインやデザートワインでも、約 13 ユーロ（約 1700 円）というお値打ち感があります。米国をはじめ国外販売ワインボトル数は 100 万本を超えています。

オリーブ栽培も盛んであり、オリーブオイル試飲会もあって、シャープな味わいから円やかな方向まで、バイオ少量栽培の良さが楽しめます。オリーブオイルのイタリア原産地証明が難しくなりつつあるイタリアとは別に、地産地消の

良さがあります。

ブルダ地域の中心地は、古来より商いの道が交差する要路でもあるドブロヴォ Dobrovo です。この市はルネッサンス式城館で知られ、同城館の地下には知られたワインセラー Vinoteka Brda があり、アンフォラワインも含め、地域のワイン栽培農家 49 軒による約 300 種類のワインを試飲できます。また、メダナ Medana、ヴィポルゼ Vipolze もワインと生ハムプロシュートで知られ、シュマルトノ Smartno は長年にわたりハプスブルク帝国とヴェネチア共和国による争奪戦の戦場になったため、城壁や防御塔を現代に残す村です。

（7）ヴェネチア共和国の趣を良く残すピランの写真（今年 2 月初旬）と、昨年 12 月中旬に訪ねたブレッド湖の風景（イタリア北東部との国境を成すジュリアンアルプスが造り出した氷河湖。遠景はスロベニア最高峰トリグラウ山 2864m）の写真を末尾に添付します。お気晴らしにご覧いただくと幸いです。

4. 芸術、アート&クラフト

～知られていない日本との関わり合い～

（1）首都リュブリャナ市内ですと、新装なった国立美術館と民俗学博物館が双璧のようです。旧ユーゴの社会主義的な伝統を踏まえつつ、現代アートの、暗喩暗示的な作品が市内のここかしこに見られます。

民俗学博物館では、裏千家有志による茶道講座が主宰され、東京支部の村上宗由教授と橋本宗静准教授による定期指導も長年続けられており、トゥルク前大統領（次期国連事務総長候補者、元国連大使、元国連事務局政務担当事務総長補）とパホル現大統領（元首相）他の関心を呼んでいます。裏千家淡交会スロベニア協会の発会も近付いています。

ビジュアルアートの分野でも、良いタッチが感じられ、香川県高松在住の濱野年宏画伯（リュブリャナ大学教授会名誉理事）が長年活動と交流を広げられた現代アート界も活発に活動

域を広げています。最近では、平和を志向する造形物作家（兼彫刻家、表千家師範）として、長年ドイツを中心に広く活躍する木本晴二氏も、リュブリャナ市庁舎において展示会を開催しています。

(2) リュブリャナと第2の都市マリボルにあるスロベニア国立マリボル劇場には、複数の日本人バレエダンサーとバレリーナが活躍中です。観劇されたドイツ大使は高い評価をつけていますし、日本人バレエダンサー複数が今年の最優秀表彰をマリボル劇場より授与されています。マリボル劇場は、2014年10月から11月に日本全国15カ所で連続公演を行い、注目を集めました。

毎年初夏には、「ジャパン・デー」という、いわば、「ワンストップ日本カルチャーデー」のような催し物が開催されています（今年は6月11日の予定）。茶道、香道から武道、包丁から観光まで、日本の多様な側面を一度に楽しめるという、現地団体主導発信型総合企画が継続されているわけです。特に、健康志向の強いスロベニア人には緑茶、抹茶の健康効用に関心が高まっています。地中海沿岸のピランでは、日本の紙芝居が人気を集めています。

(3) また、国際演劇界では、国際演劇協会ITIがユネスコ関連団体として活発な活動をしており、日本とスロベニアにもITIセンターがあります（日本の場合、同センターは能楽堂に所在。永井多恵子会長は、公益財団法人せたがや文化財団理事長、元NHK副会長）。

ITIの活動の中に「内村直也賞」があり、劇作家でもあった故内村直也日本センター会長の意志を継ぎ、日本と国際的な演劇活動の関係を深めたグループに毎年同賞を授与しており、2015年はスロベニアの演劇グループが三島由紀夫作近代能楽集をアレンジした演劇公演を行ったことで受賞しております。

5. 自然の恩恵～小さなグリーン大国、水と

木と紙とヴァイオリン～

(1) 自然とえば、スロベニアは国土に占める森林比率が60.2%と、欧州28カ国中第四位にあります。一位はスウェーデンの75.6%、二位がフィンランドの71.8%、三位がエストニアの60.6%です。高層建築を嫌い、広がりのある一戸建てでの居住を好み、車で20分も走れば緑の中、という感じです。

桜としては、リュブリャナ市内の緑豊かな大学地区や、美しいブレッド湖に、公益財団法人「日本さくらの会」（会長は大島衆議院議長、理事は逢沢一郎衆議院議員他）が寄付された桜を始め、皇室手植えの桜の木が見られます。植物園と大学関係者が懸命に桜の木々を維持しています。

(2) 欧州アルプスの最東端にあるジュリアン（シーザー）アルプスに位置するためか、水質も欧州最高水準であり（裏千家では、お稽古用に、アルプスの水を運んで使用しています）、欧州では珍しく手漉きの製紙産業がまだ少しですが残っております。

こうした環境を背景に、出版産業も盛んであり、ドイツ等の出版事業をかなり担っていると聞いております。在ミラノ日本工業デザイナーとのコラボにて、こちらの良質な木材と加工技術を活用して、注文家具を製造し、日本に輸出している日本人実業家もおられます。手仕事に長けているため、アート&クラフトが盛んであり、バイオリンやシルバージェエリーなど逸品が多々あります。注文靴のお店（Boutique Vodeb）も穴場です。

(3) リュブリャナ市内で1927年から続くバイオリン工房 Atelje Demšar (Prof. VILIM DEMŠAR) では、先に触れました地中海沿岸半島都市ピラン（ヴェネチア共和国時代のピラーノ。「ピランの塩」の独占生産と輸出、ワインや穀物中継貿易などで栄え、今でも当時の面影がそっくり残ります）で活躍したバロック時代の作曲家でありバイオリニストの名手ジュゼッペ・タルティーニ（1692-1770年。最も有名

な作品はバイオリン・ソナタ「悪魔のトリル Devil's Trill sonata」) の名を冠した最高級のバイオリンを製作しています。

なお、この工房で修行した後、イタリアの本場クレモナに留学した若手 Daniel Musek は、リュブリャナから北西に位置する中世の街シュコーフィア・ローカ Škofja Loka (ドイツ語で Bischoflack=フライジング「司教の湿った牧草地」の意味。1476年にオスマン帝国の攻撃略奪を受けたところ)の地に工房 (Daniel Musek Violin Maker) を開き、その手になるバイオリンは、国際的な演奏活動に従事するセルビア人バイオリニスト Stefan Milenkovich やスロベニアで最も有名なバイオリニストである Anja Bukovec 女史の手元で活躍しています。関連リンクは次の通りです。

www.demsarvioline.si/eng

www.daniel.musek.eu

(4) 欧州委員会は、首都リュブリャナを「欧州緑の首都 2016 年」(the European Green Capital 2016) に選びました (2014 年 6 月 24 日コペンハーゲン)。この栄誉は、高度な環境水準と野心的な持続可能な開発目標を有する都市に与えられます。リュブリャナ市の環境、経済、生活の質を改善し続けてきた努力が認められたということでしょう。今年は 3 月から活発な記念行事が進められ、特に、食品等の生活廃棄物処理環境の改善に傾注しています。

「環境業績指数 EPI」(イエール大学)によりますと、スロベニアはフィンランド、アイスランド、スウェーデン、デンマークに次いで、180 カ国中第五位につけております。リュブリャナ市と郊外の緑の環境を楽しむには打って付けの年になります。

リュブリャナのシンボルは旧市街と新市街をつなぐ「龍の橋」にある龍の像ですが、同市のマスコットはゆるきやら系の「リトル・ドラゴン」です。この緑のマスコットも、リュブリャナ・マラソン (今年 10 月) などの機会に活躍しています。

6. 滞在環境～半端でない英語力と欧州でも稀な治安の良さ、難民問題への新規対応～

(1) リュブリャナ大学社会科学学部を例にとりますと、学部長は元国防大臣、国際関係科長は前教育大臣であり、お二人とも達者な英語を話し、学生を含め、書き言葉もしっかりしています。

英語による大学院・学部の研究授業も主流になりつつあり、マリボル大学、プリモルスカ大学やノヴァゴリツァ大学 (前者は地中海沿岸のコベル市、後者はイタリア領ゴリツァに隣接するノヴァゴリツァに所在。共に昨年 6 月、城西大学が学術交流協定を結んでいます)、地中海の南北沿岸にある各国主要大学の人材・施設ネットワークを活用できるユニークな「欧州・地中海大学」(EMUNI。コベル市とピラン市南の保養地ポルトロージュ) など、主要大学も外国との学術研究交流にも熱心です。力点は経済・経営・観光・数学物理・医療薬学など。

なお、コベルは古代ギリシャ時代の Aegida、ローマ時代の Capris、ビザンチン時代では Justiniopolis、ヴェネチア時代としては Capo Distria として知られています。しかもヴェネチア時代には、都市共和国として 5 人のコベル市長兼艦隊司令官がヴェネチア共和国本体の統領(ドージェ)になっているほど。コベルはもともと、大陸側との間に塩田地帯を挟んだ小島でしたが、塩田が廃止され埋め立てられて本土と地続きになっています。先に話が出たピラン市も、埋め立て前は完全な小島でした。

(2) ここリュブリャナ市内では、更に驚くことに、肉魚野菜果物市場でさえ英語が結構通じます。広範囲な英語力と外国人に親切であることに加え、中心部の川沿いの丘に城を有する整った街並みと治安の良さ (女性が一人で夜間安全に歩けるといふ、欧州でも最高クラスの安全が確保されています) と親日性が相まって、年間約 4 万人にとどまっている邦人観光客数

の増加に繋がれば、と期待したいところです。

スロベニア側も、日本に人気の観光国クロアチアと連携して、我が国の JATA ツーリズム EXPO に合同ブースを出展する方向で努力しています。

(3) 昨年 10 月下旬以降、47 万人強の中東難民が人口 206 万人のスロベニアに流入しております。2105 年におけるスロベニア国家としての難民関連総経費は、2020 万ユーロ(約 27 億円)に達しています。ある意味で、シェンゲン圏最南端のギリシャを最外周域とすれば、シェンゲン圏外マケドニアと圏内ギリシャの間が「第二シェンゲン防衛線」となりつつあります。トルコによる難民流出抑制努力と並び、ギリシャとマケドニア支援の重要性が一層高まるでしょう。

スロベニアに目を向けますと、従来は連日、クロアチアから約数千人程度が列車とバスで流入し、諸手続きのための短期間の滞留後、同程度の人数が日々オーストリアに流出していました。その後は、受け入れ側のオーストリア側に連動し、一時間あたり約 100 名の流出入でしたが、この状況は、2 月のオーストリアと旧東欧諸国による難民バルカンルート問題協議、3 月 7 ～8 日の EU・トルコサミットの暫定的な結果を受けて、大きく変化しつつあります。

2 月 26 日、スロベニアと関係諸国は一日当たりの通過難民数を約 580 人に制限することに合意しており、シェンゲン規則の厳格な適用に向かっています。3 月 5 日、国会にて改正された国際庇護法では、庇護申請手続の迅速化、申請基準の厳格化や申請却下対象者による不服申立期間の短縮(3 日間のみ)が謳われています。3 月 9 日午前零時より、スロベニアはクロアチア国境において、シェンゲン規則の完全適用を再開し、適切な証明書の保持者、スロベニアでの庇護申請希望者と真に人道的な支援が必要な者のみの入国が許可されます。

なお、昨年 9 月 17 日から今年 2 月 25 日までの間にスロベニアに難民申請を行った 414

人の内訳としては、アフガニスタン人 113 人(約 27.3%)、イラク人 75 人(約 18.1%)、シリア人 59 人(約 14.3%)、イラン人 52 人(約 12.6%)、パキスタン人 27 人(約 6.5%)などとなっています。トルコ経由の各国難民比率の方が、シリア難民よりも遙かに多い事実を裏付けています(これら 5 カ国で全体の約 79%)。

警察、軍、国際機関とスロベニア赤十字(今年創設 25 周年を迎えます)などの支援団体の負担や財政負担は大きく、引き続きスロベニアが直面する最大の治安案件です。一時期は EU 各国警察官等の人的支援も得て制御誘導された国内移動路とそのための対クロアチア国境沿いフェンス設置地域を除き、国内に難民の影響は顕著には見られません。警察当局の話では、難民に紛れ込んだ不安因子は確認されていない模様です。一般的な治安状況の悪化も看取されません。ただ、他の欧州諸国と同様、漠然とした不安感などを政治的に利用しようとする動きは様々に看取されますので、大衆迎合主義者や外国人排斥主義者が声を大きくしないよう、慎重で賢明な姿勢が求められています。

7. おわりに

総じて、有難くも、基本的に勤務・生活上、気疲れの少ない国です。今の厳しさを増す欧州・中東時局の中では、貴重なメリットです。しかも、外国人に優しいお国柄である上に、わが国に対して、先端技術と伝統のバランスの取れた社会のあり方に敬意を払い、健康と環境を重視して和食や抹茶、日本酒に関心を示し、共に高齢化に向かう社会としての姿勢を共有し、国連改革を積極的に支持表明するなど、親日国です。

国のサイズ、立ち位置、志向などを勘案して、従来とは発想を変え工夫を重ねて新しいフロンティアを開拓し、多くの方々のご助言とご助力を得ながら、お国と皆様のお役に立てるよう

な、目に見える成果を生み出すよう心して務めて参ります。

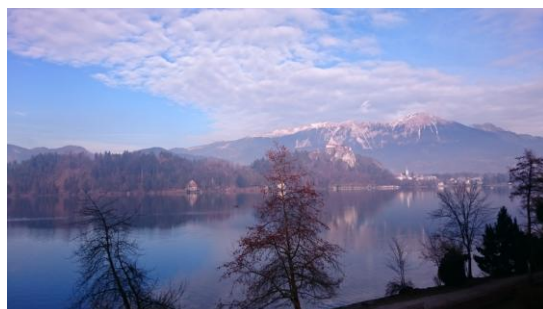
平成 28 (2016) 年3 月初め
於リュブリャナ (スロベニア)

福田 啓二
スロベニア国駐箚特命全権大使

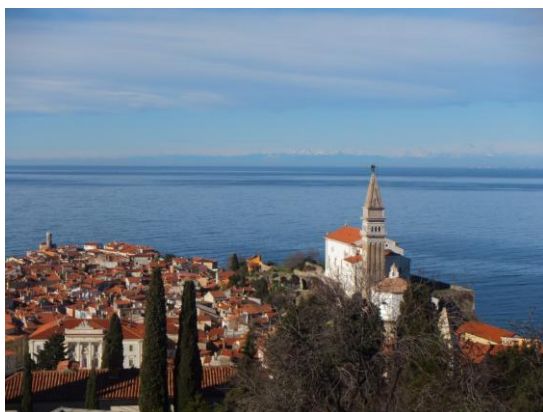
ブレッド湖畔～小島の遠景～↓



ブレッド湖畔～背景はアルプス～↓



地中海沿岸のヴェネチアの街ピラン俯瞰↓



ソチャ川流域の町カナル↓



ピランのタルティーニ広場↓



ソチャ鉄道 (蒸気機関車) ↓



ピランの塩↓



ブルダ地方の丘陵地域に広がるワイン畑↓



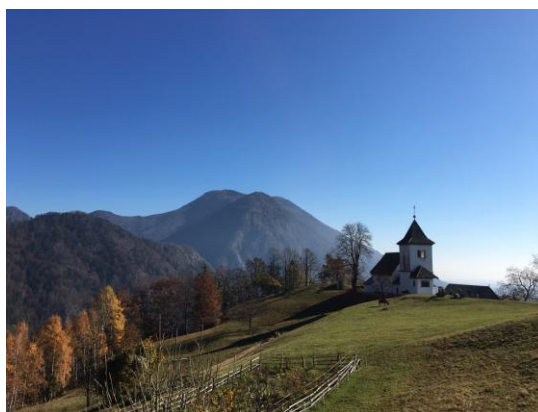
港町コベルの旧市街中心部広場↓



リュブリャナ城と旧市街↓



自然の中を山歩き↓



スロベニア国立マリボル劇場（外観）↓



リュブリャナのシンボル・竜↓



